

ヨーロッパ文化学科の2年生へ

卒業論文執筆に向けて

卒論とゼミについてのマニュアル (2025年度版)

・・・卒業の春を笑顔で迎えるために

1. 卒業論文とは何か	1
1-1. 大学生活の総決算	1
1-2. 「ゼミナール履修条件」に気をつけよう！	1
1-3. 卒業論文面接試験までのスケジュール	1
1-4. ゼミ配属はどのように決められるか	2
1-5. 不合格にならないために——卒業論文作成上の注意	2
1-6. 成功のための4つのチェックポイント——卒論評価のおもな基準	3
2. 執筆マニュアル	4
2-1. 論文の構成	4
2-2. 論述の作法——引用・要約・注の書式	5
2-3. タイトルと目次について	7
2-4. 文献表の書き方	7
2-5. 文体について	8
3. 卒業論文をワードで書くときの規定	10
4. 提出に関する諸注意（締切およびレジユメについて）	10
5. 3年次ゼミ論文執筆要領	11
6. 「ヨーロッパ文化ゼミナール」一覧	12
○参考	
・ 3年次ゼミナール登録申込書	19

1. 卒業論文とは何か

1-1. 大学生生活の総決算

よい卒業論文を書くことは、合格しなければ卒業できないからというだけでなく、その出来ばえに4年間の学習成果の総決算がかかっているという意味でも大変重要です。少しでもよい論文を書いて大学生生活の有終の美を飾るべく頑張ろう。

1-2. 「ゼミナール履修条件」に気をつけよう！

いくらよい卒業論文を書こうとはりきっていても、ゼミナール履修条件を満たしていなければゼミナールへの登録そのものができません。つまり、卒業論文も書けないし4年での卒業も不可能となります。では、そのゼミナール履修条件とは何か。それは、次の科目の単位を全て取得済みであることです。

(独語または仏語)	初級	6 単位
	中級 I (中級総合)	2 単位
	中級 II (中級総合)	2 単位
(独語または仏語)	コミュニケーション I~IV のうち	2 単位
独または仏文法実習 a・b		2 単位
ヨーロッパ文化実習 IIa, IIb		2 単位
ゼミナール (3)		4 単位
計		20 単位

3年生終了時に以上の単位を取得していない者は4年生でゼミナールを履修することは出来ないので、これらの科目の単位を落とさないようよく注意すること。

1-3. 卒業論文面接試験までのスケジュール

2年生	後期	興味のある授業を聴講してテーマを絞り込む(注1) 3年次ゼミナール・ガイダンス 「3年次ゼミナール登録申込書」をヨーロッパ文化学科に提出 3年次ゼミナール配属決定
3年生	4月	3年次ゼミナール開講
	11月末	「3年次ゼミ論文」提出(締切日に注意すること)
	12月～	提出した論文を反省し、卒業論文に向かって前進する
4年生	4月	ゼミナール開講(指導教員の指導を十分に受けてください)

- 10 月末 卒業論文題目届を共用研究室に提出（指導教員の印鑑が必要。題目の変更は 12 月初旬まで可能です）
- 12 月 卒業論文を教務部に提出（締切日と締切時間厳守、1 分でも遅れたら受け付けてもらえません。）
- 1 月半ば 卒論レジュメを共用研究室に提出(期日その他については掲示に注意)
- 1 月末～2 月初め 卒業論文面接試験(注 2)

注1) 「3 年次ゼミナール登録申込書」提出までの期間、来年度ゼミナールを担当する予定の教員が現在受け持っている授業を聴講することを許可します（ただし、必ず事前に担当教員の許可を得た上で聴講すること）。自分のテーマに関連すると思われる授業に出て、担当教員に質問するなどして、適切なテーマ設定とより具体的な研究計画作成のため努力することが必要です。

注2) 面接試験について。審査員は主査（当該ゼミの担当教員）と副査一人（ヨーロッパ文化学科専任教員）により構成されます。受験者は提出した論文について審査員から出される質問に明快に答えることが要求されます。質疑応答の時間は通常一人 15 分～20 分程度です。期日その他については掲示に注意。

1-4. ゼミナール配属はどのように決められるか

- 1) 「3 年次ゼミナール登録申込書」に研究計画（テーマは何か、どのように論じるか、これまでどんな本を読んだか、これからどんな本を読む予定かなど）を書き、提出する。
- 2) 各学生の研究計画を検討し、示されたテーマに従い最も適切なゼミナールに配属します。原則として**配属はテーマによって決められる**のであり、学生がどの教員のゼミを希望するかによってではないことに注意。
- 3) 結果は文芸学部共用研究室前掲示板に発表します。
- 4) 3 年生後期に（詳しい期日は掲示板で通知）学生は 3 年次ゼミ論文を提出します。（3 年次ゼミ論文の詳細については「5. 3 年次ゼミ論文執筆要領」を参照のこと。）

1-5. 不合格にならないために・・・卒業論文作成上の注意

- 1) **提出** 卒業論文は、所定の期日までに所定の提出先に提出しなければなりません。所定の期日と所定の提出先はいかなる理由でも変更できません。その他、表紙体裁など「履修の手引き」の「卒業論文提出要領」を参照すること。
- 2) **テーマ** 卒業論文のテーマは、ヨーロッパ文化学科の開設科目あるいはヨーロッパ文化と関係のないものは原則として受理しません。また、所属ゼミのカバーするテーマに該当しない内容の論文は評価の対象となりません。なお、学部共通ゼミが 4 年次から開講されるので、興味のある人はガイダンスに参加してください。
- 3) **論文指導** 担当教員の指導を経ずに提出された論文は評価の対象となりません。また、ゼミの欠席が著しく多い者や、担当教員の指導・指示に従わない学生は卒論指導を受ける資格を失う可能性があります。

- 4) **枚数** 卒業論文の本文の総ページ数は、(注を字数に含めずに) 400 字詰め原稿用紙に換算して 40~200 枚 (16,000 ~ 80,000 字) とする。
- 5) **引用** 原語 (ドイツ語、フランス語) の文献、資料がある場合は原書から引用する。自分で日本語にして原文もかかげる。(原文は注にまわすやり方もあります)
- 6) **剽窃行為** 参考文献や資料の内容を引用と断らずに自分の意見であるかのように書いてはなりません。そのような剽窃 (盗用) 行為が判明した場合は不合格となります。
- 7) **合否** 卒業論文は提出すれば必ず単位はもらえる、というわけではありません。**水準に達しなければ不合格**となることを忘れず、安易に構えないこと。上でも触れましたが、いうまでもなく合格しなければ卒業できません。

1-6. 成功のための4つのチェックポイント・・・卒論評価のおもな基準

1)よく勉強しているか

研究対象に関する調査が充分であること (必要かつ適切な文献・資料に数多くあたっていること。また、その内容を正しく理解していること)。

原語 (ドイツ語、フランス語) の文献・資料を利用し、引用していること。

2)論文になっているか

全体の構成、引用の作法など論文としての書式を満たしていること (「2-1 論文の構成」、および「2-2 論述の作法」を参照)。

とくに、人の意見と自分の意見が区別して書かれていること。

3)文章がきちんとしているか

誤字・脱字や意味不明の表現がないこと。文体が論文にふさわしいこと。エッセーや感想文になっていないこと (「2-5 文体について」を参照)。話が飛躍していないこと。説明不足や論理矛盾がなく、説得力があること(注)。

4)自分の意見があるか

単なる文献・資料の内容報告に終わらず、自分の意見が表明されていること。テーマ、問題設定が明確であること。独創性があればなおよい。

※**ドイツ語またはフランス語での執筆**。原書から引用するだけでなく論文そのものを、ドイツ語またはフランス語で書いた場合、その点は高く評価されます。せっかく 4 年間勉強しているのです、挑戦してみませんか！ 以上の基準に従って評価された成績は次頁の「卒業論文成績票」の様式で表現されます。

よい論文を書くためのチェック項目の一覧として、執筆の参考にしてください。

注) 教師は卒論を読むさい、あら探しを目的としているわけではなく、論文の長所を見いだそうとしています。したがって、あなた方が熱心に調べたうえで自分の主張を展開し、結果として、論理の破綻が部分的に生じることもあるかもしれませんが、それをあまりに恐れることなく、**自由な発想と、意欲的な論の展開を期待しています！**

2. 執筆マニュアル

2-1. 論文の構成

- 原則として、**序論**、**本論**、**結論**の形式を取る。

タイトル ----- 副題 目次
序論 ー問題の提示（問題提起） ：テーマを示す。なぜ、この論文を書くのか、何が問題なのか ー議論の手順の予告
本論 1章 問題の提示→検討→自説の提示→検討……→まとめ 2章 問題の提示→検討→自説の提示→検討……→まとめ (つまりそれぞれの章が「序論・本論・結論」の形式を取る)
結論 ：序論で立てた問題提起への答となること
注 (ここにまとめて出さず脚注にしてもよい) 参考文献表

- 序論は問題（論文全体のテーマ）を提起し、次にどのような手順で論じていくかを予告すること。

- 本論は、結論にいたるまでの論証の過程である。それは、1.問題の検討→2.自説の提示→3.その論証、からなる。

問題の検討も、自説の主張も、さまざまな角度から掘り下げられなければ説得力を持たない。論を展開するために必要な作業の一つは、同じ問題に関する他の人々の意見を紹介し（参考文献からの引用、要約）、それらにコメントをつけることである。

したがって引用や要約は、議論の対象を提示するために必要な手続きの一つであるのはもちろんだが、つぎのような目的も持っている。1.自分と同じ立場に立つ意見を紹介し、自説の正当性の傍証とする。2.その意見が抱える誤りや矛盾を指摘し、批判することで自説の正当性を際立たせる。いずれの場合も以上を通じて自説を展開するステップとすることができるだろう。

- 結論は主観的な「感想」に終わってはならない。自ら提起した問題への回答となっていること。

2-2. 論述の作法・・・引用・要約・注の書式

- **他人の意見と自分の考えを区別する** 論文で最も気を付けなければならないのは、地の文（自分の意見）と引用や紹介をする他人の意見の境界をはっきりさせることだ。
- **引用にはコメントをつける** 引用も要約も、その前に、今から何を論じるために誰の見解を紹介すると予告すること。また引用や要約が終わったら、その内容をもう一度自分の言葉でまとめたり、肯定的であれ否定的であれ、それに対する自分のコメントをつける。
- **引用を挿入するしかた**
 - ① 地の文から引用に移る時、引用から地の文に戻る時は、行をかえ一行あける。この場合、引用全体の行頭を一文字か二文字ほど下げる。以下の「引用の例1」「引用の例2」を参照。
 - ② 短い引用の場合はいちいち行をかえず、和文の場合は「」で、欧文の場合は《》などで囲み、地の文に紛れ込ませてもよい。この場合も出典の示しかたは同様である。以下の「引用の例3」を参照。
- **出典の示し方** 引用や要約の最後には必ず出典を示す。出典の示し方には、いくつかのやり方がある。研究の分野により違う場合があるので、詳しくは指導教員の指導に従うこと。以下、二つのやり方だけ紹介しておく。
 - ① 引用や要約の終了箇所に注番号を振り、注に送る。注はそのページの下部欄外（脚注）や章末、または巻末に配する。注において、著者名、本または論文の題名、ページを掲げる。以下の「引用の例1」参照。出典の細かい書式は「2-4.文献表の書き方」(p.11)を参照のこと。
 - ② 引用や要約の終了箇所に、著者の姓、発行年、ページを括弧で示す。このように本（または論文）のタイトルを示さないで済ます時は必ず論文末尾に参考文献表を掲げること(p.11を参照)。以下の「引用の例2」「引用の例3」を参照。
- **注の付けかた** 内容補足や注意書きを加えたい時は、該当箇所に注番号をつけ、その頁の下部欄外や（脚注の場合）、節末・章末・巻末にその記述を送る。
- **引用と出典の示し方の例**

【引用の例. 1（脚注の場合）】

二十世紀の言語学のバイブルともなった『一般言語学講義』は次の一文で締めくくられている。

La linguistique a pour unique et véritable objet la langue envisagée en elle-même et pour elle-même. 言語学の唯一かつ真の対象はそれ自体においてそれ自体のために考察された言語だ。1)

言語学を対象を言語(ラング)に限定するこの断言は、ソシュールが体系としての言語(ラング)しか視野に入れず、今日言表行為論と呼ばれる分野には関心を払わなかった、という批判によってしばしば引き合いに出

1) F. de Saussure, *Cours de linguistique générale*, Lausanne-Paris, Payot, 1922, p.317. 訳は引用者による。

—【引用の例. 2】—

ソシュールが発話(パール)ではなく言語(ラング)をその言語学の主題としたとはいえ、両者の相互依存性も強調していたことは確認しておこう。

Rien n'entre dans la langue sans avoir été essayé dans la parole,[...] (Saussure, 1922, p.231.)

なにものも、発話(パール)において試されなければ、言語(ラング)の内に入ることはない。(訳は引用者による。なお、[...] は文章の省略を示す)

このように言語(ラング)とは発話(パール)の源であるとともに、その結果でもあるのだ。

—【引用の例. 3】—

ところで、我々が指摘したソシュールの言語(ラング)概念の難解さに関して丸山は「ソシュールの用いたラングには、一つの国語体という意味での常識的用法とソシュール言語学の根本をなす術語としてのラングがあって、この二つが明確に区別されねばならないのは言うまでもないが、問題は後者のラングにも次に挙げるような少なくとも六つのカテゴリーが見られることであった。」(丸山、1981、p.265)として六つのカテゴリーを区別しているが、一方、次のようにソシュールの用語「ラング」の用法に八つもの用法を指摘する論者もいる。

■ その他

—【要約の例】—

バンヴェニストは人称代名詞「私」の特殊性に注目する。「私」とは「『私』と言っている者」のことにほかならず、それは言表が自らを産出している最中の言表行為(およびその主体)に言及する自己言及である。これにより話者は話す主体「私」として自己を宣言し、話しかける相手「あなた」との関係が可能になる。そこに定位することで他の主体とかかわることが可能になる間主体的な原点が定められるのだ(Benveniste, 1966, 第20章を参照)。

—【注の例】—

- 1)ソシュール『一般言語学講義』(原書初版1916年)からの引用は1922年の原書第2版のページで示す。
- 2)この点に関してはここではこれ以上たちいらないが、次の章で別の角度から詳しく論じる。
- 3)ここでの「直観」という語の用法に関しては次の点で注意を要する。ソシュールは形容詞「intuitif 直観的な」と形容詞「言述の discursif」を連合関係と連辞関係の対立に対応させている。

2-3. タイトルと目次について

- タイトルは論文の顔である。論文全体の内容を適確に要約し、しかも読者の興味を引くような題名をつけよう。
- どのような題名にするか考えることを通じて執筆者自身にとってもテーマがはっきり自覚されるという効果もある。
- 論文全体の内容を一言でまとめることが難しい時には、副題をつけよう。

タイトルの例 1: ドミニチ事件における南仏問題——ロラン・バルト『神話作用』より

タイトルの例 2: 彼我のキアスム——二つの文化、私と他者、哲学と非哲学の間

タイトルの例 3: 日仏語コミュニケーションの音韻論上の問題——日本語を母語とするフランス語学習者の立場から

- 目次がついていると全体の構成・内容が一目瞭然になる。読者に読みたいと思わせるためにも、卒業論文の場合は必ずつけるようにしよう。
- 長い論文の場合、読者にとって便利であるだけでなく、書き手にとっても執筆過程で目次を意識しながら書けばおのずと頭が整理され論旨の構成を助けるだろう。

【目次の例】

序論	1
第I章 音素という考え方の歴史	5
第1節 ソシュール、クルトネからプラハ学派へ	5
第2節 音素の定義の確立	9
第II章 日本語とフランス語の音韻体系の比較	19
第1節 日仏両言語の音素の種類について	19
第2節 両言語の違いについて：第一基本母音	24
第3節 両言語の違いについて：第二基本母音、鼻母音	28
第4節 両言語の違いについて：子音	35
第III章 フランス語の発音と日本語という視点	42
第1節 仏和辞書における発音記号について	54
第2節 仮名表記について	63
結論	71
注	76
参考文献	79

2-4. 文献表の書き方

- 本文で引用または言及した文献を論文の末尾にリストアップする。
- 著者の苗字のアルファベット順に並べる。苗字、名前、出版年、著書タイトル、出版社の所在地、出版社、の順に記載する。
- 欧文では著書タイトル（単行本）はイタリック（または下線）におき、論文タイトルは

《 》で囲む。

- 邦文では著書タイトル（単行本）は『 』で、論文タイトルは「 」で囲む。
 - 雑誌名の記載の仕方は著書（単行本）と同様。
 - 同一の著者で複数の著書や論文があるときは出版年の順に並べる。二番目の著書からは 著者名を繰り返さず、———で始める。
- ※ 以上の文献表の書式は一例に過ぎない。最終的には指導教員の指示に従うこと。

【文献表の例】

Austin, John Langshaw, 1962, *How to Do Things with Words*, Oxford University Press. (J.L.オースティン著, 坂本百大訳『言語と行為』, 東京, 大修館書店, 1978)

Benveniste, Emile, 1956, 《Nature des pronoms》, *For Roman Jakobson*, La Haye, Mouton & Co., repris dans 1966, ch. 20, pp.251-257.

———1966, 1974, *Problèmes de linguistique générale*, tome 1, tome 2, Paris, Gallimard.

丸山圭三郎, 1981, 『ソシュールの思想』, 東京, 岩波書店

———1984, 『文化のフェティシズム』, 東京, 勁草書房

Saussure, Ferdinand de, 1916, *Cours de linguistique générale*, publié par Charles Bally et Albert Sechehaye avec la collaboration de Albert Riedlinger, Lausanne et Paris, Payot. [本稿の引用は1922年の第2版による](ソシュール『一般言語学講義』, 小林英夫訳, 東京, 岩波書店, 1972)

———1967-1974, *Cours de linguistique générale: édition critique*, par R. Engler, fascicules 1-4, Wiesbaden, Harrassowitz.

2-5. 文体について

- 文章には小説、詩、日記、手紙、エッセー、報道、論文、書類... 等様々なジャンルがあるが、それぞれ文体が異なっている。論文を書く時は論文にふさわしい文体で書くことが必要である。原則として論文では「です・ます」調ではなく「である」調を用いる。
- では、どのような文体が論文にはふさわしくないのか。たとえば次のような主観的な表現や断定をぼかす言い回しの多用は避けよう。「私は...という気がした」「私は...と感じた」「私にはなんだか...のように思われた」「...のようだ」「...らしい」ただ、どうしても推測や漠然とした判断をせざるをえないときは、「私見によれば...と思われる」「...だろう」「...と言えよう」等の表現はゆるされるし、議論の展開にニュアンスをつけるためにそのような表現が効果的なこともある。最終的には指導教員の指導を受けて判断すること。
- なるべく「私は」と「思う」を避けることを心がけるとよい。たとえば「私はXはYであると思う」という文は「私は」と「思う」を取って「XはYである」にするとよい。ただ、「私は...と考える」といった書き方は、他人の意見と自分の主張とをきちんと区別するためには有効な面があるので、(これもまた指導教員の指示をあおぎつつ) 場合に応じて表現を工夫すること。

- 序論は論文がどういう問題に取り組むかを示すのが第一の役目であり、テーマを選択するにいたった個人的事情を書くためのものではない。次のような文章は望ましくない。

私はヨーロッパの文化に前から大変興味を持っている。それには、小学校の時に父の仕事の関係で2年ドイツに滞在し、また中学から高校にかけての我ながら多感な時期にアルザスで生活した体験が大きい。ホームステイでお世話になったフランス人家庭での色々な思い出は忘れがたい。その人たちとは今でも時々手紙をやりとりしている。現地の生活で一番印象に残っているのは言葉がうまく通じなかった体験である。そこでフランスの文化、とくに言語に焦点を当ててみたい。...

上の文章は次のように直すことが出来るだろう。

ヨーロッパの文化は近代化の手本としてつねに日本人の関心を引いてきた。今日、工業技術の面ではヨーロッパに追いついたとも言われるが、私たちのヨーロッパ文化への興味は尽きない。いや、その関心のあり方はより具体的になってきたと言えよう。交通手段の発達、経済の発展により、以前よりも容易にヨーロッパに行くことができ、また現地で生活する機会も大幅に増えてきたからである。このような意味からも、ヨーロッパの文化を生活に密着した具体的な視点で研究することには意義があるだろう。本稿は、人間の生活にとり最も基本的な要素である言語という観点からフランスの歴史と文化を考える試みである。...

どうしても私的な感慨を述べたい時は「序論」や「結論」とは別に「まえがき」なり「あとがき」を設け、その中で述べるとよい。また、個人的な体験を報告することが論旨展開に不可欠と判断される場合は「本論」の中で論じてよいが、客観的な資料を使ってあくまで事例として記述すべきである。

- 論文は随筆や感想文になってはならず、結論は私的な感慨や道徳的教訓を述べるためのものではない。次のような文章は論文にはふさわしくない。

私は今回この問題を調べてみて、言語と人々の生活の関わりを通して社会や歴史を考えることの重要性がわかった。このような興味をこれからも大事にして社会に出てからもよりよい生き方を見出すために役立てていきたいと思えます。

3. 卒業論文をワードで書くときの規定

1. A4 用紙を使用する。
2. 40 字×30 行に書式を設定する。
3. ページ番号をふる。
4. 最初に題目ページを置く。
5. 外国語は半角文字を使う。行末での分綴に注意すること。また、漢字変換の上での誤りも、誤字とみなされる。
6. 2020-24 年度の卒業論文はデータでの提出となったため、「履修の手引」の「卒業論文提出要領」に指示があるような、黒の厚紙の表紙・裏表紙、および表紙ページの自署のサインは不要となりました。今年度については、後日あらためて連絡します。

4. 提出に関する諸注意（締切およびレジュメについて）

締切は、例年 12 月 20 日の 16 時 30 分です（ただし、当日が土日の場合には、前後に変更される）。一秒たりとも提出が遅れた場合、受理されませんので、重々注意し、できれば締切の前日までに提出するようにしてください。

* 卒業論文のレジュメについて

卒業論文提出後、その要旨を A4 一枚に 1000 字程度でまとめ、一月半ばの指定時期までに提出して下さい。提出方法については、卒業論文の提出締め切り後に別途連絡します。

5. 3年次ゼミ論文執筆要領

5-1. 「3年次ゼミ論文」とは何か？

3年次ゼミ論文とは、3年次の後期に提出を義務づけられている論文のことである。この論文の目的は、第一に、卒業論文に向けて3年次から学生の意識を高めること、第二に、在籍学生の多様な関心により適切に対応するための判断材料を教員が得ることにある。担当教員は、提出された3年次ゼミ論文をもとに、当該学生が現在所属しているゼミが適切であるかどうかを3年次終了時に改めて判断し、必要と希望があればゼミの移籍を認める。したがって、レポートの延長線上にあるようなものとしてではなく、卒業論文の下書きであるという心づもりで執筆することが求められる。

5-2. 3年次ゼミ論文の体裁

上述のとおり、3年次ゼミ論文は卒業論文の下書きとなるべきものであるため、卒業論文の場合とおなじ執筆規定（タイトル、副題、目次、章・節立て、引用、文献表など）が適用されるが、字数は**8000字以上**とする。ワードで執筆する場合は、卒業論文の場合に準ずる（「3. 卒業論文をワードで書く場合の規定」を参照せよ）。

5-3. 3年次ゼミ論文の提出期限と提出先について

★2020-24年度は新型コロナウイルス感染症によって提出方法が変更され、オンライン提出となりました。2025年度以降もそれが継続されるかどうかは未定です（決定され次第、3年次生には伝えます）が、それ以前の方法を、下記に参考までにあげておきます。

提出期限は**11月末日**を原則とするが、その年の後期に正確な日時を掲示する。提出先は**3号館3階文芸学部共用研究室カウンター**とする。

6. 2025年度「ヨーロッパ文化ゼミナール」一覧

担当者名 ゼミ題目 1) 担当者の研究分野 2) ゼミナールの内容 3) 受講者に対する要望 枠内：最近の主な卒論題目

有田 英也 (※ 2025年度は「研修」のため授業を担当しません)

題目：フランス語圏の文学

- 1) フランス文学・思想
- 2) これまでもほとんどの学生が翻訳で読んだ作品をもとにテーマを決め、自分の感動した部分を原文で読み直してしっかりと考えました。教員はその手助けをするだけで、語学文学演習とは異なります。そこで、このゼミナールでは、フランス語圏の文化・思想・政治文化などの資料および研究の邦訳を講読し、出席者が文学作品や文化論の主題について研究発表を行います。後期は、4年生は主に卒論の執筆指導にあて、3年生は三年次ゼミ論文のテーマを決め、参考文献・資料の集め方、読み方を学びます。
- 3) 文学について自分がもっとも言いたいことを、もっとも効果的に他人に伝える術を、試行錯誤しながら学んでほしいです。自分の気持ちは大切ですが、細かく言語化しないと伝わりません。また、卒論提出後にフランス語のレジюме（要約）を、教員と相談しながら書いてもらうので、フランス語作文を学科での勉強の締めくくりにしてください。

- ・「ボードレール作品における〈忘我〉と〈現実〉」
- ・「ホロコースト文学における記憶の表現—エリ・ヴィーゼル『夜』から読み取る文学的手法—」
- ・「カミュに見る「寛容性」—『転落』の語り手クラマンズを中心に」
- ・「スタンダール『赤と黒』と階級闘争—現代日本における社会階層と重ねて—」
- ・「『クレヴの奥方』から考える 17 世紀フランス宮廷の恋愛・結婚・ジェンダー」
- ・「『ペロー童話』における人間にあらざるもの達—仙女・動物・人喰い鬼—」

下田 和宣

題目：ドイツ語圏の思想と文化

- 1) 近現代ドイツ哲学。テーマはとくに宗教、文化、人間、宇宙について。
最近は特に 20 世紀にドイツで活躍したハンス・ブルーメンベルクを中心とした「哲学的人間学」の流れに関心があります。
- 2) このゼミナールは、ドイツ語圏の哲学思想と社会文化をテーマとして、3年次ゼミ論文および卒業論文の完成を目指し、共同で準備を行う場所です。メインとなる形式は、受講者自身による発表と、それに対する参加者全員の討論です。なお参加者の人数によって論文執筆に役立つ補足授業を行うこともあります。主体的な取り組み（とその成果である論文）によって授業評価がなされます。

- 3) 担当教員の関心に縛られる必要はありません。みなさん自身の学問関心にとことん向かい合い、最終的にそれを客観的な研究成果として表現できれば合格です。なお論文執筆の作法について、哲学系の論文と文化系の論文とでは慣例的に異なった仕方で指導がなされます。例えば哲学系はひとりの哲学者を選びその著作の読解・解明に集中する。それに対して文化系はなるべく多くの学術的資料を収集・分析を行うこと、など。しかしどちらの場合にも大事なのは、なにが重要で本質的なのかを（ときに形式にとらわれず）とことん突き詰めて考えることです。そのためこのゼミに参加される方々にとくにお願いしたいのは、様々な関心が共存するこの場をぜひ積極的に利用し、お互いに学び合うことで考察を深めていく機会として捉えてください。知らない分野の発表だから自分には無関係、というのでは、なんだかもったいないです。なので、哲学系は文化系に現象へのタッチの仕方を学び、文化系は哲学系に思考の徹底さをできるかぎり学んでもらいたいと思います。

- ・「神の崇高さと人について——カントの批判哲学を手がかりに」
- ・「幸福とは何か——ショーペンハウアー『意志と表象としての世界』を手がかりに」
- ・「近代文化における個人の在り方について——ジンメルを手がかりに」
- ・「ニヒリズムの克服——ニーチェの仏教理解を通じて——」
- ・「ドイツにおけるエネルギーヴェンデと地域振興」

高名 康文

題目：現代フランス論・中世フランスの言語と文化

- 1) 私は研究者として『狐物語』におけるパロディの問題を中心に中世フランス文学を勉強しつつ、授業ではフランスの歴史や現代の事情を学生さんと一緒に学びながら扱うことが多かったです。このような教歴を踏まえて、成城大学に着任して以来、ゼミでは現代フランス論を担当してきてきました。これに加えて、大学院で歴史言語学担当になったこともあり、2022年度より中世フランスの言語と文化に関心を持つ学生も受け入れることになりました。
- 2) 現代フランスにしても、中世フランスの言語と文化についても、関心のあることがらについて各々の学生にテーマを決めてもらい、研究発表と討論をしながら卒業論文を仕上げていきます。テーマとして考えられるのは、現代フランスの場合、「家族政策」、「政教分離」、「教育制度」、中世フランスの場合、文学作品研究、フランス語に関する事象の歴史的視点からの考察といったこととなります。テーマを選ぶ際に大事なものは、「あなたが参照できる学術的な資料が十冊以上あるか」、「あなた独自のものの見方を示す余地があるか」どうかということです。授業は、次のように進めています。前期の冒頭に各自の関心のあるテーマについて述べてもらい、そのうちで特に受講者の関心を引いたテーマに関連する文献を持ち寄って講読をします。各回の授業の終わりに30分ぐらいとって、4年生には前期の前半から、また3年生には前期の後半以降にそれぞれのテーマについて発表してもらいます。発表は年に2回程度してもらいます。

(ここ数年ゼミ生が多く、資料の講読をする時間がとれず、学生の研究発表とそれについての討論のみで授業を展開しています。)

中世フランスの言語と文化に学生が来た場合は、研究対象となる作品や言語現象について上記

の授業とは別立てで指導しながら、卒論に導いていきます。

- 3) フランス語で書かれた文献も参考資料にして卒論が書けるように努力して下さい。でも、なるべく、日本語で読める参考文献（ただし学術的なもの）がたくさんあるテーマを選んだ方が、研究が進めやすいでしょう。

2021年度の卒論

- ・フランス移民の学校教育と日本
- ・フランスから考える日本の外国語教育
- ・フランスにおける家族形態の変化
- ・フランスの多様化するカップルと親子関係
- ・フランス女性の出生率からみる働き方について
- ・フランスの子育てと日本の課題
- ・フランスと日本の性教育の行く末
- ・女性の権利としての避妊と中絶
- ・現代フランスの宗教事情

高原 照弘

題目：フランス社会文化論

- 1) 17・18世紀フランス思想
- 2) 発表形式。各回何名かの担当者に発表してもらい、質疑応答、意見の交換、教員のコメント等を行う。
- 3) 「興味を持つ」というのは、単に漠然と興味を持った気であることではなくて、対象に深く関わり、ある程度勉強しているということです。対象を選ぶのにも、問題を立てるのにも、相当な時間、勉強することが必要です。そのことを肝に銘じて、早め早めに勉強を進めてください。

- ・「ルソー『孤独な散歩者の夢想』における「幸福」
- ・「モンテーニュによる新世界の住民像」
- ・『女権宣言』から見るフランス人女性の社会的地位
- ・「17・18世紀における髪型の変遷」
- ・「フランスにおけるヴァカンス」

滝沢 明子

題目：広域芸術論

- 1) 20世紀フランス文学批評、現代芸術論、写真論。
- 2) このゼミで扱う分野は、近現代美術、写真、映画、建築、現代アート、舞台芸術、デザイン、ファッション、芸術運動、それらの批評など多岐にわたります。一つのジャンルにこだわらない、領域横断的な研究も大歓迎です。ゼミの内容は、受講生の発表とそれにもとづく討論が中心となります。それとともに、研究とは何か、研究のすすめかた、論文の書きかたを学び

ます。3年次に参考文献をしっかりと読み込み、4年次には関心事にたいする自身の切り口、問いを明確にさせて論文執筆に取り組みます。同じゼミ生の多様な研究内容から刺激を受け、自身の知識と興味の幅を広げることが求められます。

- 3) ヨーロッパという地域性、その地域に根ざした文化と芸術の在り方にとくに目を向けてテーマを掘り下げてください。フランス語またはドイツ語を身につけ、フランスやドイツという国をよく理解することがベースにあることは言うまでもありません。

- ・イタリア・バロックと展開されたバロック建築の特徴
- ・日本版《1789 ―バステューユの恋人たち―》～愛に裏付けられた新たな革命～
- ・ベルエポック期のファッション～ウォルトを中心に～
- ・ルノワールの初期絵画における光の役割
- ・《光の帝国》におけるマグリットの二面性～サルバドール・ダリと比較して～
- ・『レイニー・デイ・イン・ニューヨーク』―悲劇と化した喜劇―
- ・エゴン・シーレ～ちぐはぐ画家と肉体のワルツ～

時田 郁子

題目：ドイツ語圏の文学

- 1) ドイツ文学・文化・思想
- 2) テキスト（なるべく受講者の関心に沿うものを選びます）の講読と個別研究発表を行います。
卒業論文の作成に向けて、テキストの読み方、参考文献の探し方、論の組み立て方、発表と質疑応答の方法などを身につけます。
- 3) 自分のテーマを見つけ、それについて考えを深める過程を楽しみましょう。

- ・「幸福とは何か―E. T. A ホフマン『黄金の壺』における幸福を巡る考察」
- ・『三文オペラ』における異化効果と社会批判」
- ・「ゲーテ著『ファウスト』における「永遠にして女性的なるもの」とは何か」
- ・「ノヴァーリス『青い花』における「子ども」
- ・「ハイネの恋愛詩『抒情間奏曲』を中心とした「あなた」の人物像」

中野 智世

題目：ヨーロッパの歴史（独）

- 1) ドイツ現代史
- 2) 文献講読と、受講生による個別発表の二本立てでゼミを進めます。
 - ①文献講読：なるべく受講生の皆さんの関心に沿ったテキストを選び、内容を理解し批判的に分析する力、論理的に考える力を培うとともに、学術的な文章の論のすすめ方、叙述スタイルなどを学んでいきます。
 - ②個別発表：三年生はゼミ論文、四年生は卒業論文の完成を目指してそれぞれ関心のあるテーマを選び、進捗状況に応じた形式・内容で発表をまとめてもらう予定です（発表の方法などは、適宜こちらから指示します）。発表と質疑応答、討論を重ねつつ、論文を仕上げている

きます。

- 論文作成を通して、歴史の面白さを実感してほしいと思っています。自身の問いに沿って調べ、考え、自分なりの歴史像を描いてみることは、やりがいのある楽しいプロセスです。いろいろ調べてみたくなるようなテーマ、自分なりの問いを見つけてください。

- ・「19世紀ドイツの女性たち—市民層・労働者層それぞれの苦悩」
- ・「第一次世界大戦における銃後の生活—食の観点から」
- ・「ナチ『安楽死』作戦とカトリック教会—抵抗した者、接近した者」
- ・「ホロコーストを生きていく—ユダヤ人生存者の戦後」
- ・「ドイツにおける同性愛—ナチスによる迫害から現代の解放運動まで」
- ・「戦後ドイツの歴史教育—「過去の克服」への取り組み」

中山 俊

題目：ヨーロッパの歴史（仏）

- フランス近現代史
- ゼミでは、関心のあるテーマについての文献及び史料の探し方やそれらの表記方法のような初歩的なテクニックに加え、文献を考察し批判しつつ独自の問題設定を発見する方法などの比較的高度な技術の習得を目標にします。研究報告もこのゼミの重要な柱の1つです。自分の報告や他のゼミ生の発表をもとに議論するなかで、テーマを洗練させ問題意識を高めます。
- ゼミ生には、歴史学の面白さを味わいながら、論文の読解、プレゼン、議論、卒論の執筆を通じて切磋琢磨することを求めます。このゼミでしっかり学ぶことができれば、結果的に、考察力、批判力、説得力、表現力などが培われ、いろいろな方面で「役に立つ」能力が身につくでしょう。担当者の研究分野とは異なるテーマでも構いません。ぜひ一緒にフランスの歴史を探求しましょう。

- ・「フランス革命期の社会における女性の地位と役割」
- ・「マリー・アントワネットの評価の変遷について」
- ・「ロマンティックバレエにみる女らしさ—19世紀フランス社会の女性の地位に関する—考察—」
- ・「いかにしてゴシック建築は歴史的記念物となったか—その盛衰の軌跡について—」
- ・「フランス人が見た日本—パリ万博とジャポニスムからの考察—」

西脇 沙織

題目：言語と文化

- 言語学、意味論、語用論
- 「言語」という切り口からヨーロッパを知り、考えたい方のためのゼミナールです。授業では、主として、受講生による発表とディスカッション、および、グループ形式でのアカデミックライティングの練習を行います。ヨーロッパの言語文化に関わる事象を日本で暮らす私たちにも無関係ではない問題として認識し、考察し、情報発信できるようになることを目指しています。
- 言葉について考えることを楽しみましょう。

*以下は、西脇先生の前任者、末永先生ゼミの卒論タイトルです。

- ・「人称詞をめぐって—親族名称から考察する日本語と西欧語の違い—」
- ・「言語と語り手 —ロラン・バルト「作者の死」をめぐって」
- ・「言語コミュニケーションはいかにして成り立つか」
- ・「言語とアイデンティティ—私とあなたの自己表現—」
- ・「時間と言語—時間とメタファーの関係性について」
- ・「記号学と都市空間」

明星 聖子（※ 2025 年度前期は「研修」のため授業を担当しません）

題目：比較文化論

- 1) ドイツ語圏の文学
- 2) 文献講読と受講生による発表の二本立てでおこないます。講読する文献は、受講生と相談して決めます。できるかぎり、ドイツ語（あるいは英語）の文献を選ぶつもりです。文献を読みながら、論文のテーマについて、議論を進めます。自分のテーマ、自分の問いを見つけるのは、想像以上に大変です。各自がだいたいテーマを掴んできたら、それについて個別に調べ思考して、その内容を発表してもらいます。それらの発表をめぐり、さらに議論を繰り返して、テーマを精緻化していきましょう。
- 3) 粘り強く、深い思考を重ねながら、真摯に自分の問いに向き合えば向き合うほど、物事の本質を鋭く見抜く目が養われてきます。それは、ポスト・トゥルースと呼ばれるいまの時代を生き抜くための重要なスキルです。論文の執筆に取り組むことを通じて、ぜひしっかり身につけてください。

*以下には、明星先生の前任者、富山先生ゼミの卒論タイトルも一部含まれています。

- ・「イゾルデの変容—民衆本からワーグナーの『トリスタンとイゾルデ』へ—」
- ・「ウィーン体制におけるカフェの役割」
- ・「カフカの『変身』における女性たちの「変身」」
- ・「中世文学に見る「食」の文化—騎士の食卓と民衆の食卓—」
- ・「ヘッセの文学における「内面への道」—西洋と東洋との出会い」
- ・「「旧きもの」と「新しきもの」—音楽にみる「世紀末ウィーン」」
- ・刺激的な三角関係—『若きウェルテルの悩み』の初版と改訂版の比較—
- ・女性・ アフリカ ・ 家族—ビルギット・ヴァイエの4部作をめぐって

村瀬 鋼

題目：フランスの思想・哲学

- 1) フランス哲学（現象学とその周辺）。これまでの主な研究対象は、哲学者としてはメルロ＝ポンティ、レヴィナス、ドゥルーズ、デリダなど、主題としては（キーワード的に並べれば）「主体性（私）」「身体」「感覚」「他者」「時間」「生」「環境」「表現」など。
- 2) 4年次での卒論完成を一つの収束点に想定しながら、各人の関心と思考とを発掘し、伸ばし、深め、広げる。あくまで本人の内発的な関心を育むことが本義であるので、ヨーロッパ文化

学科の思想系ゼミという枠を外れないかぎり、教員の方から主題を制限することはしない。通常の授業では、・ヨーロッパの思想・哲学に関係する主題での発表・討論、・ヨーロッパの思想・哲学に関係するテキストの講読、というこの二つを交互におこなう予定。ただし、受講生の現状にあわせて、上記目標にとって最善と思われるやり方を適宜工夫する。

- 3) この分野の卒論の標準型は、<ある思想家の著作を解釈しながら、ある主題について考察し、一定の結論を出す>というものです。<ある思想家>というのは、複数でもかまいませんが、標準的には一人であり、一人で十分です。例えば、「時間」を主題として「時間ってなんだろう？」と考えてみようとする、とします。そのとき、ヨーロッパの思想家を眺めてみると、例えばベルクソンという哲学者がユニークな「時間」論を展開した人として気になる存在に思えてくる。そこで、ベルクソンの本を読んで、時間についてのその考え方を検討してみる。そうすると、「ここはなるほど納得できるな」とか、「ここはちょっとおかしいんじゃないか」とかいうことがはっきりしてくるし、その過程で、自分のなかで、じゃあ本当は「時間」についてどう考えるのが適切なのか、ということも明確になってきて、最後には、「時間とはこれだ！」という、大声で主張したくなるような自分自身の確信も生まれてくる…。この一連の経過を一つの報告にまとめれば、それが一本の卒論になります。タイトルは、そう、例えば、「時間とは何か——ベルクソンの時間論の再検討」とかいう感じでいいでしょう。——そんなわけで、もし関心をもった皆さんは、さしあたり思想家や哲学史についての知識 などゼロでもかまいませんから、とにかく、「いまの我々にとって、またそもそも人間にとって、考えるに価する最も重要な主題とは何か」とか、あるいはむしろ、「自分はこの人生 でどういう主題を追究してみたいのか」とかいうことをまず考えてみて、その上で、その関心にとって面白そうな思想家を探してみるとよいでしょう。

- ・「「よく生きるとはどういうことか」—デカルトに即して」
- ・「「時間」と名付けられたものについて—ベルクソンの持続の概念に即して」
- ・「他人を理解するとは—サルトルに即して」
- ・「メルロ＝ポンティの《沈黙のコギト》について」
- ・「レヴィナスにおける主体と他者」
- ・「アランの幸福論とその背景」

吉川 齊

題目：ギリシア・ローマの文化

- 1) 西洋古典学
- 2) ①古典作品や専門文献の講読と、②受講生による個別発表を軸として、古典研究の作法を学びながら、ゼミ論文・卒業論文の完成をめざします。受講生それぞれがテキストと向き合い、主体的に議論に参加することが重要となります。①は、受講生全員で、古代ギリシア・ローマの何らかの作品および関連する専門文献を読み込み、議論していきます。（扱う作品は皆さんの関心に応じて検討します。）②は、受講生各人が、おもに各自のテーマに沿って報告を行い、参加者全員での質疑応答と討論を通じて議論を深めます。
- 3) 西洋古典語（ラテン語・ギリシア語）を学んでいることが望ましいですが、必須ではあ

りません。といっても、議論のなかで古典語が出てくる可能性は大いにありますので、関心は持ってほしいと思います。また、各自が気になる作品・テーマと出会うためにも、翻訳で色々な作品（古典に限らず）に目を通してみましょう。

- ・ソフォクレス『オイディプス王』における「〈過去〉語り」について
- ・『リューストラター』から見る女性主人公の効果
- ・プラトン『パイドロス』における神がかりの狂気
- ・『イリアス』における弓の役割
- ・ルクレティウス『事物の本性について』で語られる神の中間世界

・ 3年次ゼミナール登録申込書

文化実習 II の授業で配布します。これを提出して、配属が決まらなると 3 年次ゼミナールに登録できません。

【例：ヨーロッパ文化学科 2023 年度 3 年次ゼミナール登録申込書】

I. 研究の進捗状況

前期「研究計画書」の添削を受け、その後どのように考え、研究を進めたか [300 字程度]

II. 卒業論文研究計画

①テーマ（題目）

②なぜそのテーマを選んだか（何を論じるか・何が疑問で何を解決したいか） [400~600 字程度]

III. 文献・資料

①上記テーマに関して、すでに読んだり調べたりした文献・資料

②上記テーマに関して、これから読んだり調べたりする予定の文献・資料 [①と②を併せて 5~10 点程度、最低でも 3 点以上]

③上の「①」の文献・資料のうちで、自分が最も興味を抱いたものを一つ挙げ、その内容を要約しなさい。 [400~800 字程度]（もし現在そのようなものがなければ、「②」の文献・資料に関して、自分がそこから何を得たいと考えているか、その内容を書きなさい。字数は同じ。）

IV. その他

上記テーマを研究するにあたり現在抱えている問題や疑問があれば自由に述べなさい。 [なければ無記入でも可。記入する場合には 800 字程度以内]